カライ　ルウィンガ氏の学位論文審査の要旨

論文題目

Development of a Model for the Improvement and Maintenance of the Quality of Life of Children with Intellectual Disability in Japan

(知的障害児の Quality of Life の向上と持続を規定する要素とその構造に関する研究)

障害がある人々の QOL (Quality of Life) の向上は最終目標であり、国際生活機能分類（ICF: International Classification of Functioning, Disability and Health）にも、このことを付記すべきであるとされているが、ICF は、健康や障害を客観的に測定する物差しを示しているだけである。QOL は個々人の価値観によるところが大きい。身体障害児や様々な障害がある大人の QOL と ICF 関連因子との関係を調査した研究は数多く行われているが、知的障害児についての研究は皆無である。この研究では、フェーズ 1 で、知的障害児のよりよい状態に資する環境因子の枠組みを定め、フェーズ 2 で、得られた因子と知的障害児の QOL 関連因子を調査し、QOL に寄与する要素を評価した。

フェーズ 1 では、知的障害児の療育に直接関わっている医療関係者、教育関係者、保護者 71 名に対しデルファイ法による調査を 2 回実施し、最終的に 21 項目を抽出し、社会参加、家族のメンタル／QOL、家族構造の因子を追加した 31 項目からなる質問票を開発した。フェーズ 2 は、障害児の保護者 64 名に対し、開発した質問票を用いて調査を実施した。障害児の QOL、障害の程度やフェーズ 1 で得られた因子のスコアを測定し、相関の有無、児の QOL の因子相互の関連や予測因子を多変量解析により決定した。

QOL は、外部因子（環境、社会参加、保護者の QOL）と個人因子（障害の程度）に関連し、その予測因子は環境と社会参加で、障害児の QOL 向上のために介入が必要であることが明らかになった。障害の状態や程度に照準を当て、環境を改善して社会参加を促すべきであり、そのためには医療関係者、家族や地域（教育関係者・保健関係機関・自治体）の支援が必要である。今回の研究で、障害児の QOL の向上・持続を規定する要素が明らかになった。

審査では、外国人留学生である調査者が日本人である調査対象者とコンタクトを取るのにどのようにしたのか、フェーズ 1 で得られた環境因子の枠組みの欧米のそれと比較したときの特徴、得られた QOL に寄与する要素の障害のない児童の場合のそれと比較しての特徴、データ処理について様々な質疑応答がなされ、申請者は概ね適切に回答した。本研究は、知的障害児の QOL の向上・持続を規定する要素とその構造を明らかにした初めての研究であり、学位授与に値する優れた研究として高く評価された。

審査委員長　公衆衛生・医療科学担当教授　　加藤貴彦

審 査 結 果

学位申請者：　カライ　ルウィンガ

専 攻 分 野：　環境保健医学

学位論文名：Development of a Model for the Improvement and Maintenance of the Quality of Life of Children with Intellectual Disability in Japan
（知的障害児の Quality of Life の向上と持続を規定する要素とその構造に関する研究）

指　　導：　上 田 厚　前教授

判 定 結 果：

㊀　　不可

不可の場合：本学位論文での再審査

可　　不可

平成 22 年 2 月 8 日

審査委員長	公衆衛生・医療科学担当教授	加藤貴彦
審 査 委 員	分子病理学担当教授	山本哲郎
審 査 委 員	小児科学担当教授	遠藤文夫
審 査 委 員	臨床行動科学担当教授	[illegible]